

タコに寄生虫？

昨秋、浜辺で見つけたアオイガイに、「イモ虫」が付いているのに気づきました。

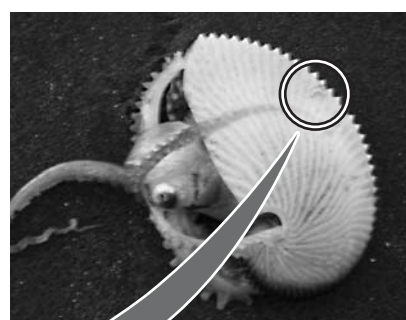
アオイガイとは、カイダコとも呼ばれるタコのメスが作る貝殻。産卵・ふ化のための、10〜20cmくらいの白くて薄い殻です。カイダコは西日本より南の暖かい海を漂って暮らしているため、かつては北海道で見つかることはほとんどなかったのですが、近年、石狩湾周辺の砂浜でも漂着した白い殻が見られることが増えてきました。特に2010年秋は、猛暑の影響で海水温も異常に高かったためか、これまでになほど大量のアオイガイが石狩湾周辺に漂着しました。

浜辺で見つかるアオイガイのほとんどは殻だけで、中身のカイダコも見つかることはめったにありません。しかし昨秋の石狩は漂着数が多かっただけに「タコ入り」アオイガイもいくつか標本を採集できました。その中の1つを見つけたときのこと——。タコがまだ動いているアオイガイの表面をよくよく見る

と、何か白く細長い、かすかに動くものが付着しているのに気づきました。まるで白いイモ虫のようです。それは、話には聞いたことはありましたが、この目で見るのは初めて。叫びそうになりました。「ヘクトコチルス！」

今から200年近く前、フランスの偉大な博物学者キュビエは、メスのカイダコの体に付着してモゾモゾ動いている虫のようなものを発見しました。彼はこれをタコに付く新種の寄生虫だとして、「ヘクトコチルス」(百のイボを持つ虫)という学名を付けたのです。しかし大きな勘違い。実はこれは、カイダコのオスの腕(いわゆる足)の1本だったのです。「百のイボ」と思った部分はタコの吸盤でした。

カイダコのオス本体はこれまでほとんど発見例はありませんが、少ない記録によると、メスのような殻は持たず、大きさはメスの約10分の1で体長2cmほど。しかし8本の腕のうちの1本だけ、ずばぬけて長いのです。これは「交接腕」



▲アオイガイの殻に付着したオスの交接腕(○の中)。



◀交接腕には2列の吸盤が無数にあるのが分かります。目盛りは1mm。

今回のこの交接腕の発見は、石狩はもちろん、北海道でも初めての記録です。2010年に採集された大量のアオイガイや中身のタコとともに、4月末より資料館のテーマ展で公開します！

(志賀健司)